

あいち農産物生産流通レポート

2026年10月号

ページ

◎ マンスリーレポート

- ・ 高温に強いお米「あいちのこころ」の栽培面積拡大中！ (園芸農産課) 1

◎ 地域トピックス

- ・ 学校と地域をつなぐ農林漁業体験学習の支援 (尾張農林水産事務所) 2

◎ 東京レポート

- ・ 自動運転の未来を考えるパネルディスカッションが開催！ (東京事務所) 3

- ◎ 東京都中央卸売市場における主要な愛知産青果物の動向 (東京事務所) 4

◎ 花 き

- ・ 切花・鉢花の見通し(県内市場) (食育消費流通課) 6

内容についての問合せ先

愛知県農業水産局農政部食育消費流通課

(052)-954-6434

愛知県東京事務所行政課農産物プロモーショングループ

(03)-5492-5400

高温に強いお米「あいちのころ」の栽培面積拡大中！

園芸農産課

近年、水稻栽培では、夏季の高温で米粒が白く濁る白未熟粒が発生し、外観品質が低下する高温障害が問題となっています。これを解決するため、愛知県が JA あいち経済連と共同開発した、高温に強く品質が安定しやすい新たな品種が「あいちのころ」です。白未熟粒が生じにくく、高温条件でも安定した品質を保てる品種として期待されています。

1 品種育成の経緯

本県は、収穫時期が8月末の極早生品種「コシヒカリ」と10月以降の中生品種「あいちのかおり」に作付が偏っていることから、その中間の早生品種を拡大することで収穫作業の分散を図るとともに、高温下でも品質を安定させることを目的に育成されたのが「あいちのころ」です。

県内で作付が最も多い「あいちのかおり」をベースに、高温下でも白未熟粒が発生しにくい特徴と収穫時期を早める特徴を導入し、2025年5月に品種登録が完了しました。



あいちのころの草姿

2 品種の特徴

夏季が高温であっても、外観品質が優れます。2025年産米の農産物検査の1等比率（3月末時点）は、「コシヒカリ」が2.2%、「あいちのかおり」が11.8%であるのに対し、「あいちのころ」は49.1%と他の品種より高くなっています。

「あいちのかおり」に特徴が似て大粒で、食味は粘りと弾力性があり、どのような食材・料理にも合うあっさりとした味です。



玄米外観品質の比較
左：あいちのころ
右：あさひの夢

2025年産品種別等級比率

（単位：％）

品 種	熟 期	等 級 比 率			
		1 等	2 等	3 等	規 格 外
愛知県全体	-	16.3	39.5	35.1	9.1
コシヒカリ	極早生	2.2	30.1	56.8	11.0
あいちのころ	早生	49.1	46.6	3.6	0.7
あいちのかおり	中生	11.8	46.0	32.3	9.9

注）2025年産米の農産物検査結果（3月末時点速報値）

3 栽培の状況

2022年に試験栽培を開始して以降、徐々に面積を広げ、2025年は1,000ha（県内の水稻作付面積の3.8%）となりました。2026年には1,500haを超え、次年度以降もさらなる面積拡大が予想されます。

2026年は生育も順調に推移し、9月中旬から収穫が開始されており、良好な品質が期待されます。

4 今後の推進方針

今後も高温対策と作期分散の一助となる「あいちのころ」の作付拡大を進め、愛知県の主力品種となることを目指していきます。

具体的には、愛知県稲・麦・大豆生産振興計画2030に基づき、2030年の作付面積3,500haを目指しています。

学校と地域をつなぐ農林漁業体験学習の支援

尾張農林水産事務所

学校教育における農林漁業体験学習は、子どもたちが食や農業への理解を深め、健康な体と豊かな心を育むための重要な取組です。尾張農林水産事務所では、小学校等が実施する体験学習に対し、必要な技術や知識を持つ地域の協力者を紹介するなど、学校と地域をつなぐ「橋渡し役」として支援を行っています。本稿では、2025 年度に春日井市立不二小学校で実施された農林漁業体験学習の取組について紹介します。

1 地域協力者と連携した野菜栽培体験

春日井市立不二小学校の5年生は、『食』から考える、私たちの未来～日本の食料自給率と食品ロス問題～』をテーマとした学習に取り組みました。

事務所は、野菜の栽培体験の実施を支援するため、農林漁業体験の協力者として J A 尾張中央を紹介しました。同 J A 職員の協力を得て、児童は、夏野菜の苗の植付けから収穫までの一連の作業を体験し、野菜が生産される過程について学びました。

また、7月には地域の産直広場を見学し、自分たちが育てた野菜と実際に販売される野菜との違いや、生産者が行う品質管理について理解を深めました。さらに、9月には野菜生育発表会を開催し、各クラスが栽培した野菜の生育状況や工夫した点について、パワーポイントを用いて発表しました。発表後には J A 尾張中央職員から講評を受け、農業に関する知識を深める機会となりました。



野菜生育発表会の様子

2 食品ロス削減につながる体験学習

秋からは、1人1本の大根を栽培し、収穫した大根を使って食品ロスについて考える調理実習を実施しました。調理実習では、大根の葉から皮まで余すことなく活用し、葉のナムルや皮のチップスなどを調理しました。普段は捨てられることも多い部位がおいしく食べられることを体験することで、食品を無駄なく利用する大切さを学びました。

また、2月の学習発表会では、野菜栽培や調理実習を通じて学んだことに加え、日本の食料自給率や食品ロスの現状、そして自ら考えた未来の日本の姿について保護者に向けて発表しました。1年かけて行われたこれらの学習は、児童にとって農業や食の大切さを実感する貴重な経験となりました。

今後も当事務所では、学校と地域協力者との連携を支援し、農林漁業体験学習の充実に取り組んでいきます。



大根の調理実習の様子

自動運転の未来を考えるパネルディスカッションが開催！

東京事務所行政課農産物プロモーショングループ

2026年9月8日（火）から11日（金）に、東京都江東区の東京ビッグサイト（東京都江東区）で、物流に関わる最新技術やサービスが集結する「国際物流総合展 2026」が開催されました。取材した8日（火）は、自動運転技術や物流DXの事例に関するパネルディスカッションがありましたので、その概要を紹介します。

1 自動運転技術や物流DXの取組

パネルディスカッションは、「自動運転の進化による物流の未来ゲームチェンジ、そして新たな価値」というテーマで行われ、自動運転技術に取り組む3社（（株）T2、（株）ロボトラック、チューリング（株））と物流DXに取り組む1社（（株）Hacobu）の計4社が登壇しました。各社から事業紹介が行われ、関西一関東間の高速道路での自動運転の実証や自動運転を想定した物流拠点の整備、輸配送の予約システムの構築など、取組経過が報告されました。

2 2030年の物流はどうなる？

司会者からの「2030年の物流はどうなっているか」との問いに対し、パネリストからは「2030年には、高速道路などの幹線輸送を中心に自動運転技術の活用が大きく進む可能性がある」との見解が示されました。一方で、高速道路以外の一般道での自動運転については技術的な課題が多く、本格的な実用化には高速道路よりも時間を要するとのことでした。

また、自動運転技術の普及に伴い、車両の大型化やパレット規格の統一など、物流全体の効率化がさらに進むとの意見もありました。

一方で、情報伝達のデジタル化の遅れを懸念する声もありました。物流DXに取り組むパネリストからは「自動運転の導入だけでは物流問題を解決するには不十分で、受発注情報や伝票などのデジタル化が不可欠。今後、デジタル化した会社とそうでない会社で、物流の効率化に差がつくのではないか」とのことでした。データを蓄積・分析することで、輸送計画の最適化や業務改善が可能となり、さらなる効率化につながるとされています。



講演会場の様子

自動運転技術は、物流業界が抱える「ドライバー不足」、「長時間労働」といった課題の解決策として期待されており、フォーラムを通じて、これらの技術の実用化に向けた取組が着実に進んでいることを実感しました。首都圏向け青果物の輸送では、物流の効率化が輸送コストの低減や鮮度維持に直結するため、自動運転や物流DXなどの技術動向を今後も注視していく必要があります。

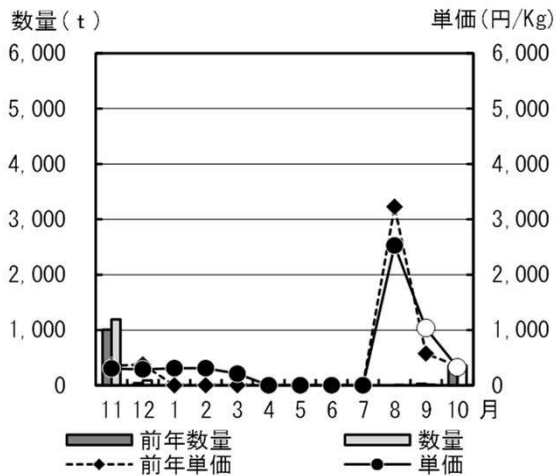
東京都中央卸売市場における１０月の主要な愛知産青果物の動向

１ １０月の見通し

品目名 かき

区分 実績等		入荷量 (t)	卸売価格 (円/kg)	前年上位3産地(%)		市場からの提言等
実績	2021年	8,003	305	和歌山	57%	愛知の「次郎柿」は、「富有」と並び代表的な甘柿で、売り場を作るのに欠かせない。産地には、生産量の維持に努めてほしい。また、近年は高温の影響で色づきが悪くなる傾向にある。高温対策を徹底して、今後も品質の良い柿を出荷してほしい。
	2022年	10,271	272	奈良	25%	
	2023年	9,051	330	新潟	6%	
	2024年	7,770	360			
	2025年	8,871	322			
	5ヵ年平均	8,793	316			
2026年見通し		9,000	300			

愛知産の動き

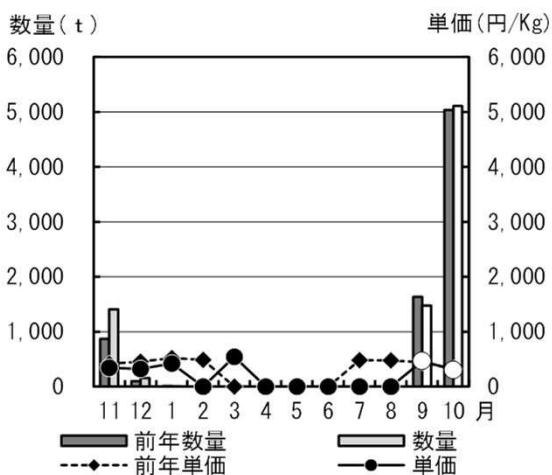


産地概況

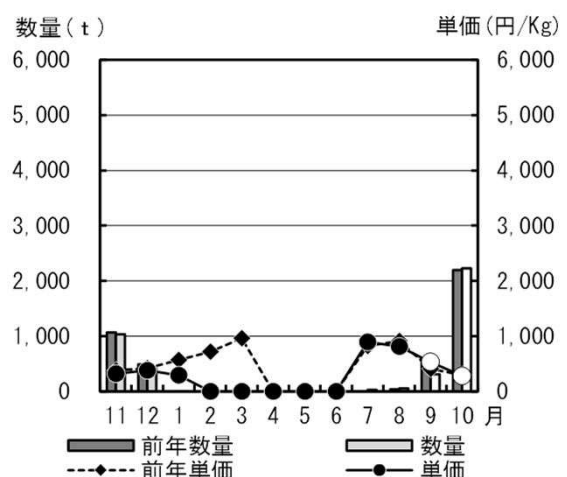
本県の「次郎柿」は9月の降雨で肥大良好となり、入荷量は前年よりも増加を見込む。高温乾燥による日焼け果、カメムシやカイガラムシの発生がみられる。露地ものは、中旬から入荷する予定で、入荷ピークは11月上中旬を見込む。「筆柿」は、生育順調だが、裏年のため入荷量は前年よりも大幅な減少を見込む。入荷ピークは中旬を見込む。

和歌山、奈良の「利根早生」、「平核無」は、9月の降雨で肥大良好。玉流れは、和歌山は2LからL、奈良は3LからL中心で、いずれも入荷量は前年並で、ピークは上旬を見込む。

競合産地の動き（和歌山）



競合産地の動き（奈良）



2 入荷量・価格の動き

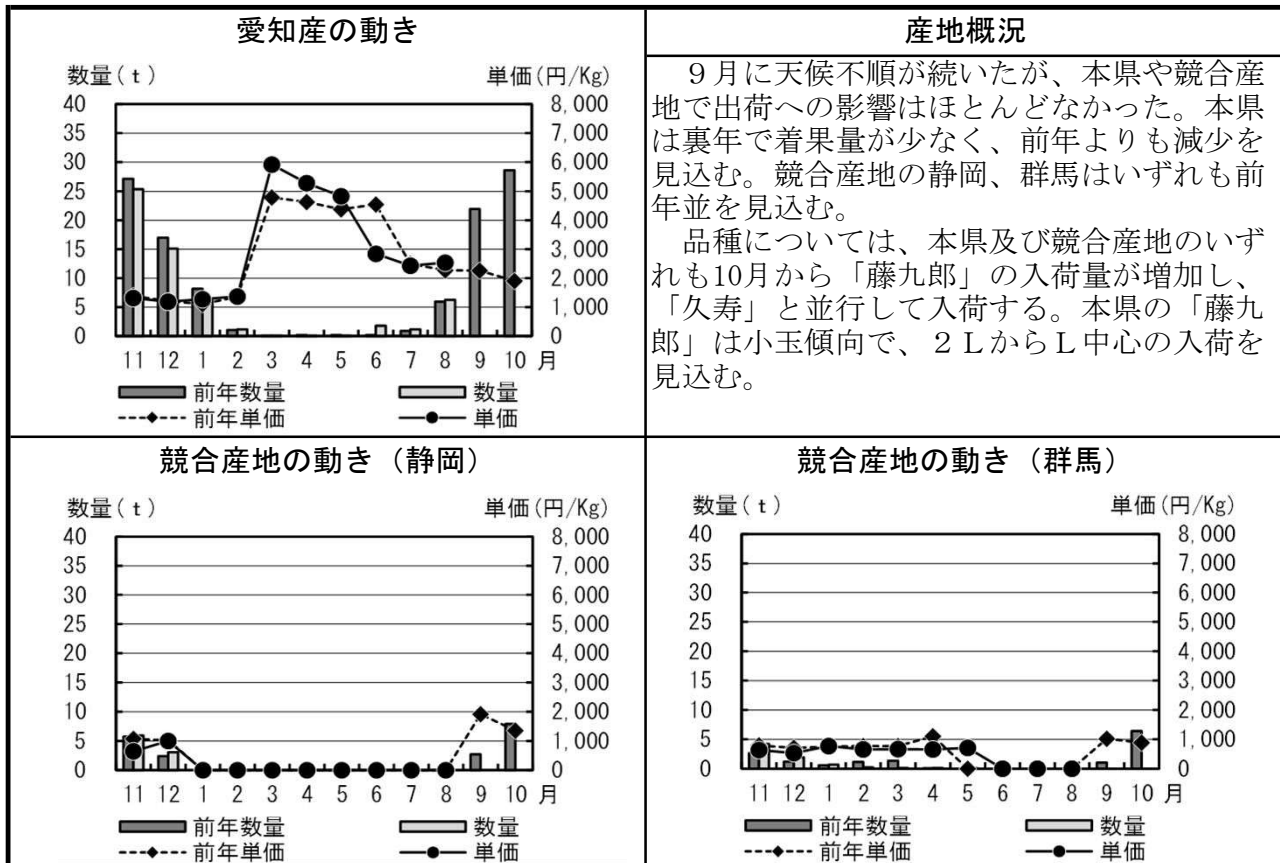
品目名 ぎんなん

前年上位3産地 (%)

愛知 39%

静岡 11%

群馬 9%



切花・鉢花の10月の見通し

前年 - 数量 前年 - 単価
 当年 - 数量 当年 - 単価

切花（愛知名港花き地方卸売市場 10月1日現在）

単位：千本、円／本

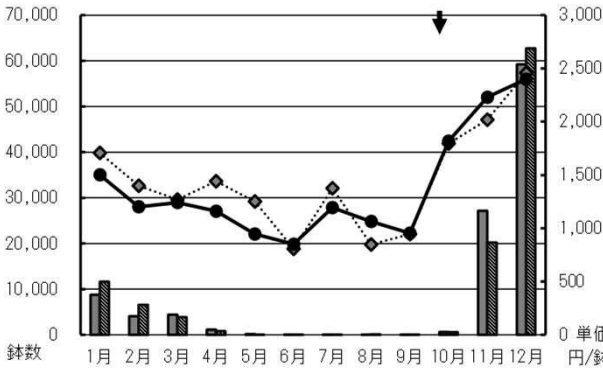
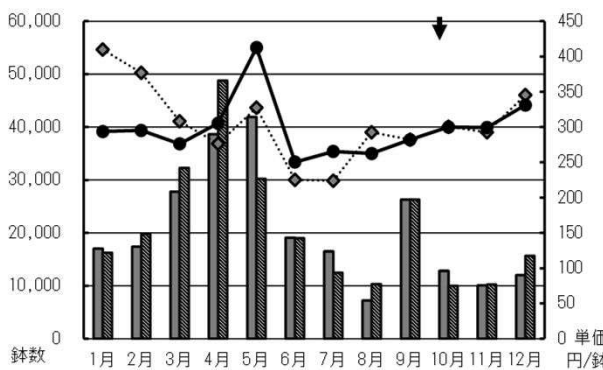
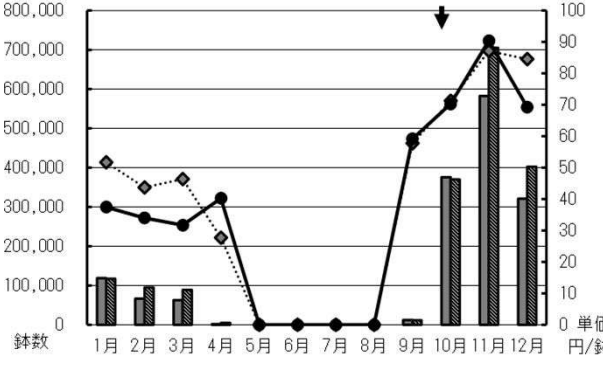
品目	区分	実績等	入荷量	卸売価格	前年及び本年の入荷量・価格の動き
輪 ぎ く	実績	2021年	1,250	55	
		2022年	994	66	
		2023年	1,025	71	
		2024年	942	68	
		2025年	1,177	58	
		5ヵ年平均	1,078	64	
		2026年見通し	1,000	70	
	概要	愛知、長野を中心に入荷の見込み。長野からの出荷は中旬頃に終盤に近づき、愛知からの出荷は11月に向け徐々に増えてくる。10月の需要は少ないため影響は少ないが、9月の線状降水帯や台風、曇天の影響により品薄で推移の見込み。			
小 ぎ く	実績	2021年	630	38	
		2022年	648	48	
		2023年	532	42	
		2024年	437	35	
		2025年	445	37	
		5ヵ年平均	538	40	
		2026年見通し	400	42	
	概要	愛知、長野を中心に入荷の見込み。今期は全体的に前進傾向で推移している。9月の長雨の影響により、品質・量ともに不安定。今後も雨や台風が続いた場合は品薄になる可能性がある。			
カー ネー シ ョ ン	実績	2021年	1,100	45	
		2022年	994	54	
		2023年	938	60	
		2024年	1,049	43	
		2025年	1,077	46	
		5ヵ年平均	1,032	50	
		2026年見通し	950	60	
	概要	長野、愛知、輸入を中心に入荷の見込み。長野からは終盤で減少、愛知からはスタートは早い但し量が少なめの見込み。また、輸入は為替の影響で減少する見込みだが、中国からは増加傾向。全体では品薄・高単価で推移の見込み。			
か す み そ う	実績	2021年	90	140	
		2022年	103	170	
		2023年	86	191	
		2024年	131	126	
		2025年	184	95	
		5ヵ年平均	119	144	
		2026年見通し	120	145	
	概要	福島、長野、熊本から入荷の見込み。高冷地は減少。西南暖地も徐々にスタートするが量は少なめである。気象や災害等の影響により、品薄・単価高となる可能性がある。			

単位：千本、円／本

品目	区分	実績等	入荷量	卸売価格	前年及び本年の入荷量・価格の動き
ゆり	実績	2021年	280	175	
		2022年	213	209	
		2023年	227	225	
		2024年	206	199	
		2025年	219	177	
		5カ年平均	188	218	
	概要	2026年見通し	210	200	オリエンタルユリは新潟、埼玉、岐阜、愛知、高知、宮崎、北海道から入荷の見込み。中下旬から西南暖地の出荷が始まる。LA、鉄砲ユリは上旬は少ないが中旬以降西南暖地が増えてくる。
洋らん	実績	2021年	350	80	
		2022年	292	123	
		2023年	359	115	
		2024年	300	109	
		2025年	336	90	
		5カ年平均	327	103	
	概要	2026年見通し	300	105	愛知、静岡、鹿児島、輸入の入荷見込み。胡蝶蘭は中盤から入荷が増え、カトレアも徐々に出てくる。デンファレはアンナの増加とともに量が安定する。オンシジウムは下位等級中心に増加する。シンビジウムはニュージーランド産が終盤となる。
ばら	実績	2021年	680	80	
		2022年	716	98	
		2023年	698	94	
		2024年	678	87	
		2025年	707	88	
		5カ年平均	696	89	
	概要	2026年見通し	690	90	愛知、岐阜、三重、山形、輸入の入荷見込み。暑い夏だったが、9月以降夜温が下がったため品質は安定する見込み。数量は少なめだが、ブライダル・ハロウィン等引き合いが強くなり、安定単価で販売の見込み。
枝も	実績	2021年	1,200	55	
		2022年	1,290	64	
		2023年	1,265	63	
		2024年	1,227	74	
		2025年	1,133	68	
		5カ年平均	1,223	65	
	概要	2026年見通し	1,200	69	紅葉シーズンに入り、赤・オレンジの引き合いが強くなる。花木類はサンゴ水木、紅葉ヒペリカム、油ドウダンなどが始まり、草花類、女郎花、ミシマサイコ、ワレモコウなどの季節商材は前進傾向で早期終了の見込み。

品目	区分		入荷量	卸売価格	前年及び本年の入荷量・価格の動き
	実績等				
ドラセナ	実績	2021年	18,028	1,123	
		2022年	20,223	1,069	
		2023年	19,023	905	
		2024年	18,175	912	
		2025年	19,435	944	
	5ヵ年平均		18,977	991	
	2026年見通し		18,000	944	
概要	入荷量は前年より減少か。観葉植物の中でも安定した需要が見込まれる品目である一方、流通量が限られていることから、今後も安定的な供給が難しい状況が想定される。特に、手頃な価格帯の商品はホームセンターや量販店を中心に一定の需要が見込まれるものの、供給不足による品薄感が強まりやすく、販売先からの引き合いが強くなる可能性がある。一方、中～大型サイズについては、単純な価格競争よりも樹形の良さやボリューム、仕立て方など商品の特徴が販売価格を左右する展開になる見込み。				
シャコバサボテン	実績	2021年	32,956	449	
		2022年	30,773	485	
		2023年	25,679	448	
		2024年	22,511	478	
		2025年	17,055	454	
	5ヵ年平均		25,795	463	
	2026年見通し		16,000	438	
概要	入荷量は前年より減少か。生産の減少に伴い、入荷量にも影響がある。近年の気象状況の影響で、早出し出荷が困難となり10月スタート出荷が定番となる。産地は関東産が多めで、販売面は量販店が中心。4～5号サイズがメインでの動きとなり、6号以上のサイズは、やや苦戦しそうな引き合いとなる見込み。				
シクラメン	実績	2021年	542,283	187	
		2022年	614,502	209	
		2023年	496,173	212	
		2024年	413,021	215	
		2025年	368,765	238	
	5ヵ年平均		486,949	210	
	2026年見通し		345,280	252	
概要	入荷量は前年より減少か。10月前半は3号ガーデンシクラメン主体の入荷となり、中旬以降4号・5号の入荷が徐々に増えるが、4号鉢以上の生産量は年々減少傾向にある。生産コスト上昇に伴い、注文価格が前年よりも若干高い設定になっており、平均価格は前年より高くなる見込み。				

単位：鉢、円／鉢

品目	区分		入荷量	卸売価格	前年及び本年の入荷量・価格の動き
	実績等				
シンビジウム	実績	2021年	4,968	1,439	
		2022年	3,275	1,803	
		2023年	2,671	1,631	
		2024年	1,933	1,693	
		2025年	593	1,794	
	5ヵ年平均		2,688	1,618	
	2026年見通し		550	1,818	
概要	入荷量は前年より更に減少か。全体の生産量が廃業等により減少している上、加えて年末に向けた出荷時期調整も重なる見込み。				
カランコエ	実績	2021年	27,950	223	
		2022年	26,219	242	
		2023年	21,042	262	
		2024年	17,924	257	
		2025年	12,820	300	
	5ヵ年平均		21,191	251	
	2026年見通し		10,000	300	
概要	入荷量は前年より減少か。4号以下の小鉢は大きく減産、東日本からの出荷を中心とした5号6号に関しては例年並の生産となる。小鉢生産が少なく価格安定を期待するが、9月の天候による品質の低下も懸念される。				
パンジー	実績	2021年	587,278	50	
		2022年	520,570	63	
		2023年	410,039	69	
		2024年	407,810	67	
		2025年	375,676	71	
	5ヵ年平均		460,275	63	
	2026年見通し		370,000	70	
概要	入荷量は前年より減少か。盆明け以降も暑さや長雨などで病気や痛みが出やすいのと、例年10月の暑さで需要がずれてきている傾向もあり、播種を意図的に遅らせている。また単純にパンジーの作付自体の生産減少も有り。下旬頃にならないと花付き商品は増えてこない見込み。				



いいともあいち運動って知ってる??

- 県内の消費者と生産者が今まで以上にいい友関係になる
- Eat more Aichi products (イート モア アイチ プロダクツ)

＝もっと愛知県産品を食べよう（利用しよう）

愛知県の農林水産業の振興や農山漁村の活性化を通じて県民全体の暮らしの向上を図るため、県民の方々に「愛知県農林水産業の応援団」になってもらい、消費者と生産者が一緒になって愛知県の農林水産業を支えているという「運動」です。

県民の方々に愛知県産農林水産物をもっと利用していただきたいという、「愛知県版地産地消の取組」でもあります。

あいち農産物生産流通レポートNo.638
2026年10月発行
農業水産局農政部食育消費流通課
〒460-8501
名古屋市中区三の丸三丁目1番2号
電話 (052) 954-6434